

「子どもが主役のまちづくり」開催結果

日 時：2019年（令和元年）11月24日（日）午後2時～4時

場 所：藤沢公民館・労働会館等複合施設（Fプレイス）ホール

内 容：

第1部 講演会 「子どもとつくる地域づくり～子縁社会の創造～」

講師：沖縄大学名誉教授 加藤彰彦氏

研究テーマ：児童福祉論

子どもソーシャルワーク論

社会福祉論

第2部 パネルディスカッション

コーディネーター：沖縄大学名誉教授 加藤彰彦氏

パネリスト：長後ファイト実行委員会代表 高見広海氏

湘南大庭地区民生委員児童委員協議会会長 森もと江氏

藤沢市副市長 小野秀樹



第1部 講演会

○当日配布したレジュメに沿って、加藤彰彦氏の体験を交えお話いただきました。

1 はじめに

子どもとふるさとについて考える

(1) 子どもと関わること、人と関わること

①小学校教師と通信簿

②ドヤ街の子ども、おとなとのつながり

(2) 子どもが主人公になるとき

①居場所のない子ども～学びの主人公になれない～

②子どもとつくるふるさとづくり～沖縄子ども白書づくり～

(3) 生きること、それが仕事

①食べる、休む、働く、仲間がいる

②聴くこと、話すこと、参加すること

2 おわりに

(1) 市民ワークショップのアンケートから

①子どもが成長すること（経験すること、交流すること）

②子どもと関わること（応える、支える、変わる）

(2) すべての人、すべての地域が宝



みなさんこんにちは。今小野副市長の話聞いていて、とてもいい声ですね、先日お会いした時から素敵な声だなと思いながら聞いていたのですが。今日は大変重要な藤沢市の勉強会に呼んでいただきありがとうございます。今日この講演会をやるまでに、何回か事前に皆さんともお話をしたのですが、藤沢は色んな活動をなさっている、それに今日はこんなに沢山の方が日曜日なのにいらして、色々行事もあったかもしれないのにおいでいただき、すごいなと思っています。私はですね、今ご紹介ありましたけれど沖縄に行ったのが2002年で、2016年、今から3年前まで沖縄にいて14年間沖縄にいて、実は子どもの問題をやっていたのですが、この間すごい色々なことを沖縄の皆さんたちに教えていただき、ずっと沖縄に居たいなと思ったくらいですが、もう一度沖縄の方たちがほんとに自分たちで自分たちの地域、沖縄をつくるってことをやろうとしているのだけれども、日本の自治体それぞれが自分たちの地域を自分たちでつくっていくという動きが連動しないと沖縄だけでは変わることがない。加藤さん帰ったらやっぱり自分の地域で、ほんとにみんなが自分たちの地域をつかっていくって、そういうものを作ってほしい、そういうことが沖縄と心を通わせることだと、こういう話を皆さんから切々とされてですね、帰ってきました。それで今老人クラブをやっているわけですけど。

今日ですね、お話のテーマですけども、今日の資料があると思うのですが、白い紙の裏側にレジュメがありますからそれを見ながら一緒にお話しをしたいと思います。まず、はじめにというふうに書いてですね、子どもとふるさとについて考える。このふるさとって言葉ですけど、老人会に入りまして、そして皆さんと色々な集まりをしますけれど、敬老会で集まりますよね、それで皆で歌を歌おうという時に、「誰か故郷を想わざる」という歌を歌い始めたらですね、『花摘む野辺に日は落ちて〜』という歌ですが、みんなで肩を組みながら大合唱になりました、2番3番となっていくうちに、もうみんな肩を組むのです。僕も一緒になって肩を組んで、泣き出す人もいます。あれ、と思ってですね、つまりふるさとって何だということですけど、このふるさとの中に出てくる、幼馴染のあの子どもこの子どもですよ。だから学校小学校時代を、あるいは色々な地域で遊んだ友達の男の子も女の子も先輩も含めて色々な人というのを思い出すと。友達と一緒に暮らしたことを、その中に母親も父親もおじいちゃんもおばあちゃんも近所の人も出てくるわけですけども、嫁に行ったおねえちゃんの話も出てきて、そしてそこには山があり川があり、そしてお祭りがあって、こういうことが次々と出てきます。これは僕らにとっていったいふるさとっていったい何だろうと。だいたいふるとはずっとそこに住んでそこがふるさとになるのですが、だいたい出かけていってしまいますよね、都会に行ってしまうたりふるさとを離れてしまいますよね。だから思い出すことになるのですけれど、ふるさとってというのはいつの時代に暮らしていた場所かという、子ども時代ですね。つまり子ども時代ということと、ふるさとというのは非常に深い、つまりそこに暮らしてきた経験・体験・思っていること、そのものがですね、自分自身の深いところで自分を支えているという、こういうことになるのですね。そういうふるさとを今、高齢者になった時に私たちがどうしようという、次の子

どもたち、孫たちにふるさとをどういう風につくっていったらいいのか、こういうことですね。それからこのふるさとって何だろうというのを一緒に考えながらふるさとをつくると僕は思っているわけですが、そのようなことを考えていきたいと思います。

そのレジュメにそって私の体験をとおして、ひとつずついきたいと思いますが、まず子どもと関わることを僕自身の体験で言いますとね、先ず小学校の教員でした、大学卒業してすぐ。初めて会った生徒たちが4年生10歳くらいでね、小さいと思い込んでいましたけど。しばらく経つと20歳いくつの僕と10歳の子どもたちと、なんというか兄弟というか友達みたいになってしまう。その時に1学期が終わると、教師は通信簿をつけるのですが、あの当時ですな「5・4・3・2・1」でつけるのですが、先生として1学期終わってつけると決まっています、相対評価で。「5」がクラスの7%、「1」も7%、「3」が多いですけどね。そうするとどの教科でも1をつけなきゃいけない、これが苦しみました。例えばね、鉄棒で逆上がり、クラスで出来ない子が数名出てしまうのです。なんとかできるようになりたいですから、授業が終わったり給食が終わったりすると練習をして、やっているのを僕も教室で見っていました。しばらく経って1週間くらいかな、〇〇ちゃんが出来ようになったから見に来てって。その子もね、見に来てって言うわけですよ。見に行くよって見に行ったわけですね。一番小さい子がいて飛びつくだけでやっとなわけですよ、この子は出来ないだろうなと思っていたら逆上がりするわけですよ、みんなでがんばれがんばれでスッと出来たのです。ちょっと助けてもらったけど出来ましたよ。よくできたなあって、よし先生と握手だ、って。その一番小さい子と握手したの、そしたらね、手がザラザラですよ、思い出したけど鉄棒すると手にまめができて破けちゃいますよね。血豆ができてそのあと絆創膏貼っているけど、またそれもとれちゃって色々なもの貼ってね、ゴワゴワの手でね、握手した時びっくりしてね。みなさん先生だったら、この子をどうするか？僕は22歳でしたけど、もう涙が止まらなくなっちゃってね、抱きしめちゃった、よくやった〇〇くん、みんなでワーって。これ通信簿をつけるということになると、何を付けるかって、体育を。一番遅くにできたから「1」でしょう、できないでしょうそんなこと。校長先生に僕は出来ませんと言いました。僕のクラスは「1」はつけられません、と。どうして「1」をつけなきゃいけないのですか、国で決まっているのだと言われて、どうしようって悩みながら結局僕は通信簿を2つ作りました。もうひとつは僕の気持ちで書いてね。その子にはあの鉄棒の時のがんばり忘れるなよ、みんなに応援してもらってできた、これからもがんばって書いて渡して。もうひとつ通信簿を渡しましたけど、これには「1」をつけました。本当に辛い思いで。僕はこういうかたちでね、つまり観点を変えたら、がんばっている子、一生懸命やっている子この子は「5」ですよ。なのに、出来たか出来なかったかということである、最後にできたから「1」になる。こんな理不尽なことはないと思って僕は教師を辞める決心をします。もっと子どもたちと普通に評価などなしに子どもと触れ合いたい、一緒に暮らしたいというふうに思って、教師をわずか4年で辞めます。そして僕はやめて日本中で、子どもたちを大事にしている地域に行きたいという思いから、北海道から沖縄まで4年半かけて放浪して歩きました。30代の

年、横浜市職員になりまして、ドヤ街というね、ドヤ街というのは東京でいうと山谷、大阪でいうと釜ヶ崎西成、横浜の寿町、というのが日本の三大ドヤ街で、ドヤ街というのは「ド」と「ヤ」、これは隠語ですからひっくり返してください、「ヤド」でしょ、宿やに泊まるってことですよ。宿というのはきちんとシーツがあって食事を出してくれる、ドヤというのはせんべい布団に裸電球ひとつ、窓がひとつあるきり、これはとても人間様が住むところではないので「ドヤ」といったのですね。そこで日雇いのおじさんたちが生活をしているわけですね。そこで僕は横浜市職員になって、ドヤ街で相談員になっていくようになるのですが、小学校の先生だったから君は子どもたちの対応をしてくれるかってことになって。でもみんな学校に行っていないのです、その子どもたちは。近くの小学校に。夜遅くまで親たちと一緒にいたりして眠れませんかから次の日の朝は寝坊をして行かなくなって勉強も嫌いになって、行っていない子が圧倒的に多い。その子どもたちが行っていないので、その子どもたちの対応をしてほしいってことで僕が入って、子どもたちに来てほしいってことでチラシを作ったり絵を描いたりして、ここに遊びにおいでって、生活館って建物があって、その2階を全部使って3つくらい大きい部屋があったので、そこを全部使って子どもたちと遊んだり勉強したりしようと思って、呼びかけるのですが、誰一人来ない。どうしたらいいかなと思って、窓の下を見てみると子どもたちが公園で遊んでいたり色々しているわけですよ。あそこまで来ているのになんでここに来ないのかなって。しょうがないから公園に行って色々食べ物を持って行ってね。おにぎりとか一緒に食べながら、あそこ生活館に子どもたちの教室を作ったけど、なんで来ないの？と聞いたら、みんな異口同音に言うのが、あそこは大人がいるでしょって。どういうところだったらいい？と聞いたら、子どもたちばかりのところがいいって。子どもたちばかりで、もし事故があって怪我でもしたら困るから大人がいなきゃだめだよって言って、大人だったらどういう人がいいって聞いたらなんて言ったと思います？女の人って。若い人って。若い女の人だったら行くって。それからもうひとつあって、なんか腹減っちゃっているから食べ物があるといいって、ラーメンでもなんでもいいから食べるものがあるといいって。そこで職員と相談して、若い女性がいいという女子学生しかいないので地域の横浜の大学をまわって、来てくれないかと。20人くらい女子学生が集まって、2、3人ずつ割り振りして。そうすると子どもたちがみんな覗きにきて、女の人がいるとチョコチョコと入ってきて、最初は女の子が入ってきて繋がっていくわけですよ。料理をしたいって言うから、なんか作ってくれる？と言ったら女子学生が私やったことないからできませんって。それでどうしようかと思って地域の寿町のおばさんたちに言ったら、簡単だよ、やってあげるよって来てくれて色々なものを作って来て、おからケーキみたいのを作って来て。今度は女の子が編み物をしたいって好きな彼氏にあげたいから編み物をしたいって、で今度は編み物ができるおばさんと呼んできたり、男の子が野球をやりたいっていったら野球ができるおじさんがきてキャッチボールをしたりして、あっという間に10人・20人の子どもたちが集まってきてね。子どもたちだけではありませんが、何かをやっているという時にはその人たちの言葉とか思いを受け止めなければいけない、何がした

いかってことをちゃんと受け止めてやらないとできない、まずニーズを聞くってことですね。こっちがこうしてあげたいといっても、求めているものが違うっていう。こういうことが僕の中でのひとつの教訓だったと思います。

それから2番目にいきますけど、子どもが主人公っていう今日の大きなテーマですけど、僕のはのちに児童相談所のケースワーカーを10年ほどやります。僕は40歳から50歳まで10年間児童相談所でケースワーカーをやりました。この時に、不登校の子どもが何人もでましてね、横浜で。学校に行かない子がいて、その子たちと家庭訪問をしてとにかく色々話をしまして、児童相談所にどうやって来させたらいいかなと思って、これは一緒に食事をしたりとかゲームをやったりとか 来た子どもたちが小学生から中学生まで7~8人いて、勉強の真似事をしたわけですよ。勉強をしようってことになるんですけど、ただ足し算引き算やってもね、じゃあどうしようかってことで、クイズをやるのです。ひらがなの「す」という字を4つ書いて、ハイこれは何でしょうと。「す」が4つなので「すし」でしょう。小学校3年生の子がパッと手を挙げて「すし！」って答えるのですが、中学校3年生の子は、なぜすしなんだ、すが4つ書いてあってすしって、じゃあ先生食ってみろよ、と。この子はだから、切り替えることが出来ないのだな、と。このことが分かってから、行くと一生懸命調べて問題を作って当てさせて、そのうちその中学3年生の子が、僕が行くと問題が書いてあるのですよ、一番傑作なのが、カタカナのキッス、キッスする国って？自由にキッスするからスウェーデン？と言ったら、何言ってるの、違うよ、どんな音がする？と言われて、チュウ？チュウゴク？中国！と、こういうふうにして子どもたちが問題をだして、だからこの時間に行くと、子どもたちが次々と面白くて難しい問題を作って僕に出します、調べたり考えたりして。生き生きしていますよ。あ、学校の授業がつまらないのは、先生が主人公だからだ。先生はみんな知っているけど子どもは知らないでしょ、先生が教えるでしょ、先生は嬉しいでしょ。子どもが主人公になってやると、その子が主人公になってやると、中心になってやると嬉しいわけ、ヒントを出したり。僕はいつもやられちゃうけど、できないことがしょっちゅうあってですね。最後は話という漢字があって、横にチョンと点が打ってある、何にも分からないですよ。点で話にならないと。ああそうかと。つまり、子どもたちが主人公になって学び始めた、自分が本当にやりたいことを始めたのです。グングン子どもたちが育っていくってことがそのことでよく分かるわけですね。主人公に子どもたちがある意味で、変わっていく、育っていく、こういうことですね。その時に分数の授業があって、2分の1って書いて、下が分母で上は分子ですよ、お母さんは大きいから下でね、子どもは小さいから上にいる、子どもがだんだん大きくなって2分の3になったらどうするか、うちを出ていかなきゃならないからね、“いっかにぶんのいち”となる。そしたら一人の子が、加藤さんこの出て行った“いっか”の「1」ってうちのおやじだよ、うちのおやじ出て行ったから。この「1」は、分母分子だから分父だ！って。よしこれノーベル賞だっていって僕は褒めました。そうしたらその子学校に行きましたよ、その後。そして担任の先生に世界で初めて加藤に教えて、2分の3は“いっかにぶんのいち”、この「1」をなんというか、「分父だよ」と。加藤さん何を

教えたのよと大騒ぎになりましたけど。でもそういうことが始まって行ってそこで勉強会も始まって、どんどん進むのです、自分でやりたい勉強をドンドンやるのです。英語がやりたいです、とか広がっていくわけですね。ある意味主人公になると生き生きします。自分が本当にやりたいことをやるというのは、ほんとにやらされるのは辛いですよ。

もう一つはですね、僕沖縄にいたでしょう、沖縄に14年間いて、ふるさとってことを考えることになりまして、沖縄に行って出会っていくっていか沖縄でも子どもたちは大変な状況に実はあるのです。しかし、沖縄は一貫してお祭りが大事ですね。何回もお祭りがありますけど、その中の一つにエイサーというのがありますね。これをやるわけですけど、このお祭りをやる時というのは本当に小さい子から20~30代のお兄さんまで、一緒になって練習を積むわけですよ。何日も何日も練習して、お祭りでは練り歩くわけですよ。これを子どもたちがジーっと見ていて、そして小さい子がやりたがるわけですよ。そして先輩のお兄さんたちが一生懸命教えてくれる。そのお兄さんたちがもう少し難しい獅子舞を教えようとなると、先輩のおじいおばあが獅子舞をどういう風にやるか見事にやるわけですけど、それを見ているわけですね。つまり大人から小さな子どもたちまで、そのお祭りをとおして一緒にやるという体験をとおして、こういうことが中でできていて、子どもたちが先輩の人たちがやっている色々なお祭りから、旗頭というデカイのを持ちます。背中に乗せたり頭に乗せたりします、これは大変でね、これに憧れるわけですね。そして真似したくなってくる、僕は真似るということが実は学ぶということの源流であるということを実感として沖縄で感じました。つまり、子どもたちは見ていて、ああいいなあと憧れる人がいて、それを自分でも真似したいと思う、昔自転車も落ちたりなんかしながら練習してけん玉もそうですけど、とにかく色々なことというのは、あの人みたいになりたいなと思うことを一生懸命真似していくという、それが文化をね、いつの間にか引き継いでいくわけですね。大人たちは若者たちがやっているものを次の子どもたちが見ながら自分のものにしていくという、そういう流れができていくのです。これが沖縄のひとつの文化ですね。あと、昔あった出来事をお芝居にして、例えば、昔悪い王様がいてそれをみんなで作っつけていい村を作り直したという、地域を、歴史を知らないうちに学んでいくという。これは沖縄で暮らしているうちに、自分たちの地域を大事にし、そこで起こった昔の歴史をもう一回自分たちの中に蘇らせて、そしてあの人みたいに生きたいってことを子どもたちも感じ始める。沖縄に着いてすぐでしたけど、全国学力テストというものが復活したのですね。学力テストをやると沖縄は最下位なのです。国語も算数も最下位で先生方も落胆するし、親も子どももがっかりで、成績が一番低いという、当たり前だろうと親や子どもたちもいましたけど、なんとかこれはしたいということで一生懸命やるわけですけどね、なかなかその生活と勉強とがくっつかないですよ、これはそういうことではないのではないかと、やはり子どもたちがどういう暮らしをしているかということを手帳に見ようということで、成績が一番低いことの原因を自分たちでもうちょっと納得するために調べようということで実態調査をやることになったのですね。藤沢でも実態調

査をしているようですが、そうして見ていったら、子どもたちはアンケートの中で日常の暮らしのなかで、家でゆっくりできることがほとんどない、経済的にも非常に厳しいという状況が分かってくるのです。お父さんお母さんたちに仕事がなかなかない、食べることも自体は困らないのですけどね、沖縄は。それ以外文化的なこと、お祭りはできるけど、自分が人生で選んでいく職業というのが限られるということがわかってきて、その子どもたちが将来生き生きとするためにはどうしたらいいのかっていうのが大きな課題になってきています。そこで地域の方たちがあっちこっちで小さな集まりをつくって勉強を教えてくれたり、子ども食堂というのは昔からありましたよ、沖縄の中で子どものことに取り組んでいる人たちの集まりを作ろうと思ひましてですね、沖縄子ども研究会というの、私は沖縄大学にいましたから、集まってもらって、子ども会をやっているところ、学童保育、保育園、小学校、それを報告してもらったのです。あっちこっちでやられている方々が知らなかったと、あそこで同じようなことをやっているのを知らなかった、真似させてもらおうというのを今から10年近く前2010年に、だいたい沖縄には100くらいそういう地域がありました。みんなに記録を書いてもらって沖縄子ども白書というものを作りました。これを作って皆さんにお配りすることができたのですが、あのこれがね、沖縄の中では大きな突破口になって、お互いやっている方が協力してこっちでやらないきゃいけないことをこっちでやらないきゃ、一緒に協力したらもっと大きな集まりができるって、行政の全体が見えてくるかも、じゃあこれを応援しましょうというということで、地域ごとに、いくつかやっていた集まりがまとまって連絡協議会というのが出来てくる。これが後に、子どもの貧困対策をしようということで貧困調査をすることになりますけど、この時に地域ごとがみんなまとまって調査に協力し始めます。そして、子どもたちの実態の貧困率が出まして、これは日本では当時16%だった、同じ時期にやって29.9という約30%に増えるということにつながってくるのですが、こういうこともはっきりしてきたということで、なんとかしたいということで、でもこれは民間だけでは無理だということで、沖縄自治体ひとつひとつの市町村、県が本気で思って、これは子どもたちの環境づくりをしななきゃいけない、学力だけの問題ではなく、子どもたちの生活を支える親御さんたちも支える、そういう対策のために予算を組む、これは県議会もおるということで沖縄で初めて子どもの貧困実態調査というのでできたわけです。これがさっき言ったように、30%という数字が出るのですが、僕はこれを内側に入って一緒に根回しをしたのですが、これを見ていて実態がちゃんとわかってきて、みんなもそうかと、300人の学校があるとそのうち100の子は貧困ですよ。これは大変なことになりまして、自治会の会長さんがこれはなんとか町内会でも放っておくわけにはいかない、この子どもたち3分の1が貧困だとすれば勉強もできないし食事もとれてないかもしれない、ということで町内会の一室を使って、月にいっぺん食事会を開くのです。みんな恥ずかしがって最初は来ないのですが、5人とか10人とか来ますよね、どんどんどんどん噂が広まって、どんどん来るようになってそういうことになって町内会全体がなんとかしようってことで食事を作る人も出てくる。自分たちで町内会の人食べ物を出し合っているとパ

ンクしちゃうので、なんとか行政が協力してくれないかということで、ここで行政の方が担当する社会福祉協議会というものが責任をもってやろうということで、藤沢市にも実はあると伺ったのですが、コミュニティソーシャルワーカーというのができるのです。こういう動きが始まっていったのを目の前で見ていたので、実際子どもたちの問題にみんなが気が付いて、そして大人たちが子どもたちの現実がわかってきて、そうしたらそこから新しい動きが始まるということを知ったということです。

3番目にいきます。“生きることそれが仕事”、僕は沖縄でこういう本を書きました。“生きることそれが僕の仕事”という本を書いたのですが、生きることとはいったいなんなのだろうかということとずっと沖縄で考えさせられていました。生きることなんて難しくてそんなことはひとくちで言えないよという人の方が圧倒的に多いと思いますが、沖縄で生きることといたら、まず生きることの一番大事なことは、実際に生きてなきゃいけない、生きていなかったら生きることの目的も何もない、したがって生きることだと。

生きるためには何が必要かと、一番生きるために必要なものは何かということとを徹底して教えられるのですね。そこに書いてありますが、まず生きていくうえで何が必要かということ、もちろん呼吸しなければいけませんけど、食べることです。食べ物がなくなったら人間生きてはいられないのです。だから食べることに不安がない、安心して食べられることというのは生きていくことで一番の鍵。2つ目は、ゆっくり休んで寝るところ、住むところ寝るところ。家ですね、休める場所が必要です。そしてもう1つは、仲間がいることだと。ひとりぼっちでは生きられない。食べること住むところそして仲間だと、こうなっていますね。そして、それに付け加えるとすると、働くこと。働くことというのは、どこかに勤めるということではなくて、その人の仲間がいるとその仲間の中で役割がある、それを仕事という。この人にはこれをしてもらう、あの人にはあれをしてもらう、自分の役割があると。掃除をすることだけでもそうだし、何かを運んでくれるでも皆に教えるでもなんでもいいですよ、その人の役割がある、それを仕事というとする、食べることができて、住むところがあり、仲間がいて、自分の役割がある、こういうことが生きることなのだ、これもまあ沖縄ではつきり教えてもらいましたね。これをつくっていく、これはまあ実現できる、これが生きることだということふうにしたのです。そうすると、実際に子どもたちが集まってきたり、色々なことがあるのですが、その時に、僕はまあ単純に皆で集まってワイワイできればいいと思ってたんですが、例えば話すということですね、これは今まで単純に中身をちゃんと聞き取ることだということふうになっていたわけですけど、話せばいいと思っていたのですが、これは僕の原体験でいうと、横浜の寿町にいた時に、寿夜間学校というのをやっていたしね、そこで識字学校という字の勉強をやっていたのですが、その時にみんな自分のことを話そうということで自分史を語る会というのをやりました、寿町でね。その時なかなか自分のことを話さないですが、すごい辛い経験があるおじいさんが戦争中の体験とかをファ〜と話しました。この話を聞いた時にみんながそれに感動しましたが、その話は人前ではあまり話したくなかった辛いことを話して、放送局の「放」と

いう字ありますよね、「放す」のです。自分の中にずーっとこれまで抱えていたもの、しこりのように残って辛いのです、いつもそれを思い出すと辛い、それを「放す」「手放す」。それを聞いていた人が、俺も似たようなことがあった、爺さんそうかい俺もそういうことがあってね、とその人も自分の辛かったことを手放す、ハナす、ハナす、ハナす、そうするとこれが「ハナし合い」ですね、みんながハナし合うということは、自分の持っているものが、本音が出せる、気楽に話せるということで、パッと軽くなる、自分がね。わかってもらえた。気楽に話せる、自分も楽になる。こういうようなことが話すことの原型だなと寿町である程度わかっていましたが、沖縄にいと、例えば本土にいた方でその方は本も書いていますが、震災を機に多子のひとり親世帯の方が沖縄に逃げ込んできました。でもなかなか仕事もなくて地域の中でお部屋も借りましたが、お金もなくなっていっちゃって、そういう時になって、どうしようどうしようと思っていた時に地域の集まりに行って、そうしたらひとりのおばあが、「あんた言いたいことあるんだろ？ここで言いなさい、色んな偉そうなこと言っているけど、そうじゃなくて一番言いたいこと言いなさい」と。そしたらその人が「私、助けてほしいです！」って泣き出しました。「それを言うのを待ってたサ、みんなでこの子を助けてやろう！」というのが沖縄ですね。それで彼女は救われて沖縄で中心的に子どもたちのために頑張っているわけですけど、そういうことが沖縄でありました。この「ハナす」、そして当然聞くわけですけども、その聞くという字がそこに書いてありますけど、普通聞くというのは門の中に耳があって、耳だけで聞いているだけですけど、難しいほうの聴くという字は耳で聞くのは当然ですけど、下に心があるので、心で聞く、真ん中は目を横にした字で、だから目で聞く、それを「聴く」だと思っていて、その人の雰囲気とか、その人の思いとか受け止めていくっていうのは「聞く」ですけど、こういう感じで受け止めるというのが沖縄のなかではものすごいなど。自分が参加できるところ、一緒になって参加できるところがあると、その参加している中で自分も出せるということが始まっていく、こういうことですね。

今日これからこの後、お二人の方と小野副市長とお話しをしますが、つまり子どもたちというのは、これからある意味で成長していくわけで、そしてその今暮らしているところは自分のふるさとになるわけですね、原体験を作っていくという。そこでどんな体験をするかということによって自分の人生を作っていく。その人たちが次の時代を作る。そういう意味でいうと子どもたちを軸に考えていくということですね。子どもが1人いると、赤ちゃんが産まれたりすると、ひとの輪が出来てくる、いつの間にかね。僕は子どもというのは産まれた時からみんなが関心をもっていて、子どもが成長していくプロセスをずっと地域そのものが、あるいは周りの関心のある方たちが丁寧に見ていくという、こういうことが出来ていったら、その大人たちが、その子どもたちを支えている人たちがお互いに手を取り合っていくというか、縁をつくっていく、子どもを軸にした縁をつくっていく、出来ていくってことですね。そういう意味でいうと、子どもを軸にしていくことによって地域がもう一回繋がる、縁ができる、こういうことになっていくと思うのです。そういう存在、昔は血縁・地縁、ということがよく言われていま

したが、今それはどんどん消えていっていますよね。そして何を軸にしたらいいかと考えていたのですが、子どもたちを軸にしていくことで今新しいことが始まると思うのです。老人クラブのなかでも、赤ちゃんや小さい子を連れて若いお母さんたちが同じ時間に来てくれますね。その子どもたちが一生懸命手伝ってくれますよ、だからみんなでお礼しようってお菓子を買ってきたり、終わったあとみんなで食べたりね、ずっと来るわけですね子どもたちが。いつの間にか子どもとお年寄りの輪ができています。考えてみたら、昔は子どもを育てるのが老人の役割でした。親は忙しいのです、農業をやったり漁業をやったりね。だからお年寄りも、昔は50代から年寄りでしたが、そういう人たちが見てくれてね。そして、お年寄りが子どもたちに昔の話をしたりね。ところが、今はお年寄りはお年寄りで介護される方になっちゃって、子どもは子どもになってバラバラになってしまいましたよね。アメリカインディアンのことわざに、「お年寄りとお年寄りを切り離してはならない、何故か」といって、過去と未来を切断することになるからだ」と。僕はこれを聞いた時に、ああ今これがやりたいな、こんな風なことを思ったわけですね。そして、地域のなかで関わることになる、ふるさとの主人公は誰かと、ふるさと地域にずっといる人というのは誰かという、間違いなく子どもたちでしょ、それからお年寄りもいるでしょ、お母さんがいるでしょ、それから地域で仕事をしている商店会の人たちがいるでしょ、そしてそこに関わる方たち、行政の方も含めてですけど、子ども・お年寄り・お母さん、そして地域で仕事をしている人たち、この方たちが主人公で、この人たちが一緒になって子どもを軸にしていくという、こういう地域づくりをできたらいいなと思いますね。

今日これからお二人の方から具体的なお話を私も一緒に聞かせてもらいますけど、その中でいったいどういうことが今私たちに出来るのか、もし気になる子がいた時にこの気になる子をどうやったら支えることが可能なのか。そのシステムはあるのか、どうしたらいいのかというふうなことを一緒に考えていきたいと思います。私の話は以上です。ありがとうございます。

第2部 パネルディスカッション

○長後ファイト実行委員会代表 高見広海氏の事例発表

長後ファイト実行委員会の高見と申します。よろしくお願ひいたします。

簡単に自己紹介ですが、自分は元々花屋をやっています。今は花屋の他に長後主催のシェアカフェっていうカフェをやっています。人生のなかで、飛び飛びで農業高校の教員をやらせていただいたり、子どもと関わる事が多くて、花屋をやっていると、長後の街というのはご年配の方が多いので、お花ひとつでも配達をしてあげたりすると、行った先でご飯が待っていたり、なかなか帰してくれなかったり。元々、子どもやご年配の方も好きだったので苦ではなかったですけど、長後のまちの中で、お金じゃないと

ころの貧困的などころが見えてきたりして、見えながら花屋をやっていましたけど、だんだん長後のまち自体も商店街もさみしくなっていて、長後で店をやっているなかで、自分に何かできないかなと思って、とある飲食店の空き店舗が出た時に、日替わりでお店をやったら面白いとか、空き店舗対策でシェアカフェを開きました。最初の理想は、地域のおばちゃんたちがそこで肉じゃがを提供できたらいいなど、安易な発想からだったのですが、そこはなかなか食品衛生の面で難しくて、シェアカフェを開いた先に、もう一步地域の方に対して何か貢献できないかなと思い、子ども食堂を開きました。今画像が出ていますが、ほんとはこの子ども食堂も、3年前のお正月にたった1回だけやるつもりだったのです。3年前の1月2日に開催したのですが、どうせ子ども食堂をやるのなら、正月出かけられない子どもがいるかもしれない、という理由で1月1日に強行突破で開催をして、一番最初は豚汁一杯とご飯の提供だけできればいいやと思っていたら、やりますって告知したら色々なところから寄付が届いたり、地元のラーメン屋さんから餃子が届いたり、みかんが届いたりなどして、結構豪華なメニューになって、その日開催していたら次いつやるのですかと言われて、次のことまで考えていなかったのも、丁度1月2日が第一日曜日だったので、思わず来月第一日曜日にやりますと言ってしまい、ズルズルと3年が経っていたという感じです。多分みなさん色々なところで子ども食堂があったりしますが、最初のきっかけはそんなに他のところみたいに思い入れがすごい強くあって始めたわけではなく、なんとなくと言ったら失礼ですけど、なんとなく始まって必要という声が出てきて、続けられているという感じで開催しています。子ども食堂をやっていたなかで、長後の活性化も込めて月一回、もっと何か出来ないかなという夢ができるようになって、いきなりはなかなか難しいので、子ども食堂を利用して7月に流しそうめんの企画をしたら面白いかなと思って、長後で子ども食堂はしていましたが、それを抜け出してまちの中で地域の施設を借りて流しそうめんをやらせていただいたりして、普段子ども食堂は少ないと35人くらいで、多いと80人くらいですけど、流しそうめんをやったらいきなり150人とか最初来て、それで知ってもらえるようになり、7月は流しそうめん、お正月だけは餅つきを毎年やっています。また、もう1アクションできないかなと思い、去年あたりからハロウィンのイベントを企画しまして、また子ども食堂の枠を超えて、地域の人の中から声をかけて始めたイベントですが、去年は16店舗の方にご協力していただいて、流しそうめんが多い時150人だったので、それくらいの参加者が来るかなと思っていたら、ふたを開けたら300人来られて、300人くると、全部のお店を回っていただきたいので、一店舗に300個のお菓子が必要になってきて、かける16店舗になると、数万円。ただこのハロウィンのイベントも単にイベントがやりたいというだけでなく、ハロウィンを企画した後に思いついたことですが、ハロウィンのイベントをすることによって、今は世間では知らない人と喋ってはいけないとか関わってはいけないということが結構先に出ちゃっていますが、どちらかというところ、小さいまちなので本来は顔の見える関係であったほうが絶対いいはずだと思っているので、お子さんが外のまちなかで何か怖い思いをした時とか事故をした時に、近所のお店屋さんにも助けを求めら

れるのかなと思った時に、なかなか難しいかと。このようにハロウィンの企画をして普段関わったことのない人と関われるようになるので、外で何かあったときも、子どもが助けを求めやすくなったり、お店側の大人も外で子どもが泣いているときに声をかけやすくなったり、というきっかけづくりになりますし、長後はお店側も高齢化しているので、お店側の人間が外で何かあった時、あっ、あの団子屋さんのおばさんだとか子どもたちが助けてくれる、というふうなまちづくりにつながるのではないかと。今、顔を見られるまちづくりとしてハロウィンを企画させていただいて、去年は300人だったのですが、今年は500人来られて、年々増えていくのかなと。参加店さんも16店舗だったのが30店舗になって、必要としてもらっているのかなと感じました。あとハロウィンと同じようなシステムで節分もやりました。それも子どもたちがまちなかに鬼がいっぱい歩いていたら面白いなと思ったので、鬼の仮装をしてもらってお菓子ももらって歩くという企画もしています。そんな中で更にもっと面白いことが出来ないかと思い、駅のロータリーを借りて12メートルのこたつをセットさせていただいて、最初はみんなで花見が出来たら面白いなという安易な考えだったのですが、そこから色々ひねらせていただいて、こたつを使って地域多世代交流会という目的として、ハロウィンと同じで他の人と喋ってはいけないというのではなくて、この空間では誰とでも喋り、一緒に遊んでもらうということを目的として。当日は20人くらいのボランティアさんの協力を得て、お客さんは100人ちょっと来られたのですが、平均して皆さん3時間くらい滞在してくれて、一番長い方で5時間滞在してくれました。地元のおじさんと高校生と一緒に将棋をしたり、もうちょっと真ん中の映像になると、高校生と幼稚園児がオセロをやっている、幼稚園生はオセロのやり方はわからないけど、高校生が1時間くらいそれに対応していて、この幼稚園生はひとりっ子でしたが、次の日そのお母さんから電話があって、ひとりっ子であり友達もいない子だったけど、この場所では知らない人が教えてくれて遊んでくれて楽しかった、またやってくださいという声があったり。左側の女性とお子さん知らない人同士で、ビーズやおはじきで遊んで仲良くなって。なので、この日本人ならではのこたつを囲みながら、地域で交流会を開いて顔の見えるまちづくりをめざすという計画をやらせていただきました。

自分はインコカフェをやっているのですが、子どもの居場所づくりとか地域活性とはまた違うのではないかと思われがちですが、インコカフェをやりながら動物の保護活動をしていまして、犬猫ではなく、鳥などの小動物中心の保護活動をしているのですが、去年の12月からそれ専用の施設を長後のまちの中につくって、(画像を指しながら)これは近所の小学生の女の子が、暇だから来たと言って、たまに来ては、こうして動物の掃除をしてくれたり、右はモルモットを抱っこしている写真ですが、動物は抱っこしてもらえただけで慣れていくので、里親さんが見つかりやすくなります。この子にとっては、ここは居心地が良くて来てくれるのだと思うのですが、今日は写真はないのですが、地域のおじさんおばさんたちが、うちは鳥が中心なので、鳥かごがいっぱいあるので、たまに来て、1日1時間くらいですけど、鳥数に合わせてボランティアさんが掃除をしやすいようにして下さったり、動物好きではない人たちも、動物をつかって

自分たちで居場所をつくりながら動物の命をつなげる役目も一緒にやったださっているということにつながっていったり。またここでお子さんと地域の人たちとの繋がりができたり、動物をとおして繋がっていているなど感じています。ここまで狙ってやっていたのですが、自然とこういうふうになっていきました。

今回新しく10月から「ちょい助ちょうご」というものを始めさせていただいて、「ちょいと助っ人いたします」の略です。ちょっとした、お年寄りのペットボトルが開かない、瓶のふたが開かないなど、困った時に誰に助けを求めるのかなと思ひ、家族がいるお年寄りだったらいいですけど、長後は結構ひとりの方が多いので、頼めない、頼む相手もご高齢の方同士なので、じゃあどうしたらこういうことを地域でフォローできるかなと。有料になってしまいますが、5分100円で気軽に呼んでくれれば、ペットボトルのキャップくらい開けますよ、という考えで始めました。ここのところ依頼がきているのは、皆さんご高齢の方ですが、布団が干せないから助けてほしい、お風呂の天井が洗えないから助けてほしいなど。今日は子どもの居場所づくり的なテーマですけれども、子どももお年寄りも同じっていう認識で自分はいて、現実では、お年寄りも困っているし、逆に、この間一緒にちょっと草刈りをやったりするのに、小学生のお友達と一緒に連れて行って、近所の知っているお宅だったので、子どもと行って雑草取りを手伝ったりとか。「ちょい助」を使いながら子どもも地域のボランティアとしても繋がったり、色々な繋がりで自分たちの居場所づくりをしているというかんじです。また今度新たに近所のコンビニのオーナーさんとお話をして、遊ぶ場所がないから出かける人がいないから餅つきを1月2日にやっているのですが、1月1日の朝に子ども一人でおいぎりを買いに来るといいう話をつい最近知って、遊ぶ場所だけではなくて、1月1日の朝にごはんが用意されていないという子がいることにその時初めて気付かされて、今回初めて1月1日にコンビニの前で豚汁とごはんを提供するという企画を準備しています。この会場の入口にポスターだけ貼らせていただいているので、ちょっと見ていただけるといいなと思っています。この1月1日の企画も、子どもだけの話しか聞いていなかったですが、親がごはんを用意しなかったり、お金があるのかないのかわからないですけど、それ以外にも、お年寄りも明けましておめでとうを言う相手がないとか、という現実もあったりして、1月1日は子どもから大人、お年寄りまでの居場所づくりとしてコンビニの前で豚汁とごはんを使って居場所づくりをしようかなという計画をしています。

自分はそんな活動を長後でやらせていただいています。せっかくのこの機会なので、もしもこういう活動と一緒に協力してもいいなあという方がいたら、一緒にやってもえたら嬉しいなと思います。ありがとうございます。

○湘南大庭地区民生委員児童委員協議会会長 森もと江氏の事例発表

ただいまご紹介いただきました湘南大庭地区の森もと江と申します。よろしくお願

いいいたします。

藤沢市には子どもの家が17館ございます。今ご紹介いただきましたが、湘南大庭にも子どもの家があります。通称ちびっ子ドームとよばれ、毎日多くの子どもたちが利用しております。私はそこで出会った子どもたちのことを運営委員として、また時には地域のおばさんとして、または民生委員児童委員として接しております。数ある事例の中で今日は2つほど皆さんにご紹介したいと思います。

まず初めの事例です。小学校低学年の男児が、もう数十年前になりますか、6月頃来まして「オレはいらない子だから、ここ（2階）から飛び降りて死んでやる！」って。子どもの家には毎日2人の見守る方がお当番でおります。その方たちが一生懸命説得なさっていたのですが、なかなかその子が聞いてくれないということで、私のところに一本お電話がありました。ああ、あの子かと思いながら私も、行くまで飛び降りないでね、という思いで一生懸命走ってちびっ子ドームまで行きました。その時に、その子とは民生委員児童委員をとおしてその子とお母さんとも少し繋がりがありました。そこで私は第一声がその子を見た途端に「飛び降りられるものなら飛び降りてみろ！」と、ほんとお恥ずかしいのですが、大きな声で言ってしまいました。その子を下から見たら、柵から出て、必死につかまって、でも落ちるような、ほんとにみんなが心配していたのですが、そんな中で無表情なのです。それで私はネット階段を登って「今行くからね、待ってて、とにかく動かないで！」ということで一生懸命登りました。外からは2人の見守る方をお願いをして、外の階段の方から行ってくださいということで行っていただきました。ようやく2階にたどり着いて3人でその子を隙間から中に入れて、私もその子をガーンと抱きしめまして「バカなことするものじゃないよ！あなたが死んじゃったらお母さんだってお父さんだって悲しむよ！おばちゃんたちだって悲しいよ！」と言ってずっと抱きしめていました。その子が「ギャー 痛いよ」って泣き出しました。なかなか涙が止まらなく、その間ずっと一応抱いていました。そして、段々離れていきまして、もう大丈夫ということで、友達とその間色々話はしていましたけど、もう友達と遊ぶということで「じゃあおばちゃん帰るよ、バイバイ」と帰って行きました。

それからその年の8月です。私が出掛けたら彼が下の方から登ってきて、とってもニコニコ元気に「おばちゃん、森さん」と呼ぶのです。あれ？と思ひまして、「どうしたの、今日すごい楽しそうだね、いいことあったんだ？なんかあったの？」と話したら、「うん、だって明日お父さんのところに行くんだよ、それもお母さんと2人でね！」と教えてくれました。とっても嬉しそうにそこでピョンピョン跳ねているのです。わあすごい嬉しいのだな、「いいね、お父さんどこにいるの？どこまで行くの？」と聞いたら教えてくれました。「じゃあ夏休みだし、お母さんも行くなら3人でいっぱい遊んでこられるね」と私がその子にお話ししました。そうしたら、その子が急に怒り出しちゃったのです。「だめだよ、お父さんはお外に出られないんだよ」って。お父さんは病気なのかなと思ひました。

それから数年が経ち、連絡があり、進路かなと思ひまして、そのことでちょっと話が

したいと言われました。うん、わかったということで、会ってお話をしました。そうしたら、彼が「お母さんに彼氏ができた。その彼氏がオレに、ここから出てけと言われた」と。「え〜、じゃああなたはこれからどうしたいの？」と話したら「オレは高校に行きたい」と言いました。「じゃあその話、担任の先生にした？」って聞いたら「オレばかだし、勉強できないし、そんなこと言えないよ」って。お母さんにも、彼氏がいるから言えないというので、「じゃあ森さんが学校に行ってきたでもいいかな？」って言ったら、うん、と言われましたから、その子の中学校に行きました。そして、今この子はこういうふうになりたいと、自分の将来を考えているようですから、お願いしたいということを担任の先生に話したら、その後担任の先生が、お母さんそして彼と三者面談をしてくれました。そこで、経済的にもちょっと大変でしたから併願はできないということで、公立高校一本の単願で受験をすることになりました。しかし、今まで学習をするという環境でもなかったものですから、どうなのかなと、でもこの子が一度決めた、初めてです、初めて彼が決めた夢・希望、これを私がなんとか手助けできないかなと思ひまして、その子の中学校のほうに図々しくいきました。そして、この子になんとか、結果はどうあれそのプロセスを、一生懸命頑張るプロセスを経験させてあげたいとお話ししました。そして、その校長先生が担任とお話しするようにセッティングしてくださいました。担任の先生は数学の先生でした。色々お話ししている間に先生のほうから、「あまり時間はとれないかもしれないけれど、なんとか少し時間をとって私のほうで数学を見ます」とおっしゃってくださいました。それで、じゃあ私が英語をみますということで、3人で、彼と先生と私で、2か月弱だったのですが、回数的にも切羽詰まっていたので、少なかったです。でも彼は、この日のこの時間に学校だよ、と言うと、必ず来ました。そして、3人で一生懸命頑張りました。でも、結果的には不合格でした。そうすると併願ではなかったので、高校の夢が閉ざされました。私もその子が合格発表を見に行くと言った日に、なんか嫌だなと思ひながら、実は校長先生のほうからもちょっと聞いていたものですから、どうやって声をかけようかなと思ひていました。その子から連絡がはりました。「やっぱり落ちちゃったよ」ということでした。でもちょっとでも勉強して、初めて勉強した、それが少し嬉しかったよと言ってくれました。私も、よかったと思ひまして、あなたが決めた道だから、ここまで短い時間だったけど、頑張ったじゃないの、これはこれで次を考えようということで、学校も熱心に考えてくださって、その子に就職先を紹介していただきました。そして、そこに行くことになり、頑張って真面目に一生懸命にやりました。そうしたら、「住み込みでいいよということで今度しばらく会えないよ」と、ちびっ子ドームに顔を出してくれました。それから色々なことがありました。でもなんとかすり抜け、彼も頑張ってお母さんも最後頑張ってくれました。今は二十歳過ぎて髭も生え、かわいい時の面影もありませんが、私はいつもちびっ子ドームにはおりませんが、「森さんいる？」と訪ねてくれます。とっても嬉しいです。そんな事例がひとつ。

それから次の事例ですが、市民センターからの帰り道、夏でしたか、ちょっと寄ってみようかなと思ひてちびっ子ドームに寄りました。そうしたら、小学校高学年の男

児が妹と遊びにきておりました。真夏なのに、厚いトレーナーの長袖と長ズボンを着ているのです。他の子たちはランニングやタンクトップ、短パンとか。自由に動いて鬼ごっこをしたりして遊んでいるのですが、その時のお当番の方に、「何かあるのかしら、トレーナー着ているけど暑そうだね」ってお話ししたら「そうなんです、もう汗だくなので脱ぎなさいって声をかけたけど脱がないのです」と言うのです。私もちょっと気になったものですから、近づいていったら、もう汗だくですごいのです。顔が真っ赤になってハアハアしているものですから、これは倒れたら困るなと思ひまして「ねえお水飲んだら？暑いんじゃない？トレーナー脱いだら？」と声をかけたのですが、「大丈夫です、大丈夫です！」と。大丈夫ですという時の顔はニコッとするのです。どうしたのかなと思ひながら、少し様子を見ていました。そうしましたら、座るところを探して、ちょっと動くと思ひます。やっぱりちょっとおかしいなって。「脱いだら？お水飲んできたら？」と言ったら水を飲みに行ったのです。そしたら、そのグループの友達が「おばさん！」と私のところにきまして、「この子、〇〇に虐待されているよ。でも妹は虐待されていないよ」と言ったのです。虐待という言葉がお友達の口から出たものですから、ちょっと心配だなと思ひまして、その子に、「ねえねえ今さ、冷たいタオル持ってくるから、図書コーナーでお座りして冷やしたら？」と言いましたら「はい」と。常時冷やしてあるタオルをその子のところに持っていき、おでこでも冷やしたら？と言ったら、その時にその子が、「あ～冷たい」（当時の動作を真似して）こうやったときにお袖が折れたので、そうしたら火傷の跡のようなものが見えたものですから、「あれ？どうしたの？」と聞いたら「何でもありません、大丈夫です。僕が悪いんです。〇〇は悪くないです」など色々なことを言いました。あれ、私〇〇のことなんか聞いてないけどなと思ひながら、とにかく暑いから脱いだら？と言ったのですが、「大丈夫です」と、そしてやはり「僕が悪いんです。僕がいけないんです」だけなのです。あれ？と思ひまして、「そんなに我慢しなくてもいいんじゃないの？」と色々な話をしていたら、ポツリと涙が流れたのです。その後その子は児童相談所に一時保護されたそうで、顔色も良くなり、お食事も美味しいよと言ってくれているそうです。

2つの事例をとおして、他にもまだまだありますが、私が出会ってきた子どもたちは、家族のことが大好きです。家族のことは絶対に悪くは言わなかったです。自分が悪い子になって・・・というほんとに胸を打たれるような子どもたちとの出会いでした。色々な事がありますが、色々な話を聴いたり、子どもたちと接するなかで、やはり生まれてきた環境に関わらず、どの子も夢と希望を持って、成長していつくれたらいいなと思ひました。本日はご清聴ありがとうございました。

○パネルディスカッション

コーディネーター：沖縄大学名誉教授 加藤彰彦氏

パネリスト：長後ファイト実行委員会代表 高見広海氏

湘南大庭地区民生委員児童委員協議会会長 森もと江氏

藤沢市副市長 小野秀樹

(進行 加藤氏)

みなさんと同じ気持ちですね、高見さんと森さんのお話を聞いてね。高見さんのほうには花屋さんから始まって、どんどん広がって皆が集まってくる、ああ皆何かを求めているのだろうなということを感じますし、それに応えている高見さんは素晴らしい。森さんのお話は2つの事例でしたけど、ほんとに受けとめて子どもと一緒に本音を語っていくという、そういう姿を教えてくださいましたが、これから小野副市長も含めて、これから私たちがどう考えているか、何ができるかということを進めて議論していこうと思います。

最初にちょっと高見さんと森さんのほうに、まとめていうとですね、子どもたちは結局何を求めているのだろう。さっき夢と希望を持って欲しいと言った時は、何を求めているのだろう、ということ。もう1つは、お父さんお母さんご両親、あるいは家庭は何を期待しているのか、行政とか色々な人たちにね。そのようなことをお話しいただければと思うのですが。高見さんからいいですか。お願いします。

(パネリスト 高見氏)

子どもたちが何を求めているのか、ということですよ。何を求めているかはわからないですけど、やっぱりその花屋をやっていると、近所の子どもが来ます。何しに来たのと聞くと、毎日暇だから来たと言って、暇つぶしの場所にはいいのか悪いのかわからないですけど、学校の友達のことを喋りたかったり、親のことを喋りたかったり、全然そういうことに触れず、動物を触ったりとか。自分が感じることは、お手伝いをしたいという子が多いなということを感じています。だいたい来る子たちは、親御さんが共働きでいなかったり、母子家庭でなかったりというので、自分の価値観だと17時になったら帰るよというかんじですが、お母さんが18時にならないと帰ってこないからといって18時まで居たいと言われていたりということが多いなと。家に帰ってもひとりぼっちだったり、友達は17時まで遊んでくれるけど、友達は17時には帰ってしまうからひとりぼっちになるからということで、17時からうちに来たりとか。うちに居る以上かまっていられないので、ちゃんとしっかりお仕事とかお手伝いをしてもらいながら、そういう条件だったらいよいよと言って居させてあげますが、ただ何人かの子どもの親は、親との接点が自分自身もなかったり、逆に親御さんが挨拶しにきてくださることもあるのですが。何かあった時、いいですようちの場所使ってと言っても、何かあった時怖い思いをするのは自分なのかなと思いながら。ちょっと話がずれてしまいましたけど、しゃべり相手が欲しかったり、ひとりぼっちでいたくない場所が欲しいということは感じました。

(進行 加藤氏)

どうもありがとうございました。今のことでいうと、やはり結局暇だから来たというのは、結局ひとりぼっちでさみしい、喋ったり相手をしてくれる人が欲しいというそのあたりからだと思うのですが、森さんいかがですか。どんなふうに、子どもたちが

何を感じ、あるいは親御さんたちは何を期待しているか。

(パネリスト 森氏)

私も、子どもたちはお話を聞いて欲しい、ということがかなり強いです。というのも、お母さんは朝からもう子どもたちが学校に行く前から出ていく方もいらっしゃいます。帰りもやはり17時過ぎまで働いて、それからお家に帰ってきてとなると、子どものお話も聞いてあげることができない、そういう方が周りに多いです。それと、子どもはスキンシップを求めてきます。私が座っていると、知らないうちにお尻をズルズルしながらチョココンと座ったり、おんぶをしてと言っておんぶをする時もあります。でも重たいから降りてと言うとヤダヤダと言ってなかなか降りてくれない子もいます。ですから家でお母さんも忙しそうですし、なかなか子どもと対話をするという時間もないのかもしれないかもしれません。それで、また子どもの方は土曜とか日曜に遊びに来るとき、そ〜っと来たとか、えっ？どうしてと聞くと、お母さんはいつも働いている、だからママは今日は11時頃までは帰らないようにしてここで遊んでいるとか、子どもも結構気を遣っています。そのようなことでよろしいでしょうか。

(進行 加藤氏)

いやいや、よくわかりますよね。つまり親も本当はね、さっきの事例もそうですけど虐待をしてしまったけど、本当はやはり子どもと関わりたい、でもその時間がない。朝早くから出掛けなきゃならない、夜も遅く帰ってくる、対話もできない、ということで非常に悩んでいる。子どもも話をしたいし聞いてもらいたい、本当はお父さんお母さんとスキンシップをしたいけれどできないということ、そこに来てやっている、多分こういうことだろうと思ういます。そうすると、今お話を伺っていると本来、子どもたちは家庭の中など様々な場所で色々な居場所があって、安心できる、話せる、ほっと出来る寂しくない、こういうことがかつてはあったのでしょうかけれど、現代社会の中では親がなかなかできない、家庭ができない、ということが非常に増えてきたというふうに思います。そうすると、そういう子どもたちが行ける場所が欲しい、という。あるいは相手をしてくれる人が欲しいということになりますよね。親もそういう場所があって、そこで安心できるのであれば、お任せしたい、自分の出来ないことをしてもらいたい、相談したいと思っているかもしれないです。そうすると、地域の中に子どもも親も求めているような場所みたいなもの、子どもたちの居場所みたいなところ、親が安心できるような居場所みたいなものが欲しいと、それがポイントになると思うのですが、これもお二人に伺いたいと思います。どのような居場所が今必要なのか、何ができるだとか、作ったらいいかとか、そういうふうな居場所について何かご意見がありましたら。高見さんどうぞ。

(パネリスト 高見氏)

実際子どもの家とかありますけど、自分なんかはお店をやっていたり、あと自分がやっている子ども食堂は貧困を対象にしていなくて、地域の居場所としてやっているの、どなたでも食べに来てくださいという感じでやっています。ただ、やっている中で、この家庭は困っているのかなと目につくようになっていたりすると、行政に繋いだり、

貧困対策をやっているところに繋いだりしています。ふと思って、居場所づくりをして箱をつくってくれるのは行政で、自分なんかは店をやっているので間口を広くして、そういう子を見つけたりとか、うさぎとかカメを一匹公園に連れていくと集まってきます。それだけでも子どもは喜ぶし、命の大切さとか動物の大切さを覚えていったりとか、公園の遊びも少なくなっているんで、たったそれだけでも公園が楽しくなったりとか。そこに地域のおばちゃんでも子どもたちと遊びたい人とかかけっこういます。子どもが道路で落書きをしていると、近寄って行ってしまうようなおばちゃんですけど、逆に子どもたちは引いてしまいますよね、喋ってはいけないと言われてるので。でも本来はもっと地域で喋り合えたらたらいいいし、もっと公園で遊び合えたらいいなとは思っているので、自分は公園を活用したそういう場所がもっとできたらいいなと思います。なかなかつくれるものではないので、自然とまちづくりから自分はやっていかなくちゃいけないのかなと。ハロウィンなどで繋げられればと思います。

(進行 加藤氏)

どこでも子どもたちの居場所になればいいということですよ。居場所というのは、つくってここにいらしゃいというのではなくて、どこでもそういう場所をつくっていきたい、地域全体でつくっていく、そういうことが居場所ではないかと。森さんのお話で課題を抱えた子がお二人いましたけど、そういう子たちを受け止められるかどうかと迷いますよね、その時に居場所としてどうしたらいいのかとかいうか・・・、気になる子をね。こんな居場所だったらいいとか、こんなふうにできたらいいとか。気になる子がいたときにどういう居場所があればいいと思いますか。

(パネリスト 森氏)

今、子どもの家をひとつ例にとりますと、10時オープンで、17時で終わってしまいます。先ほどお話したように、お母さんはお仕事で早く出てしまう、学校もまだ7時は門が開かない、というような時に、そういう今藤沢市である場所、そこに子どもたちをお母さんがお仕事に行く時にちょこっと預けていくとか、そのような場所があったらいいなと思います。夕方、先ほど高見さんのほうからもお話にもありましたが、17時になっても帰れない子がいます。鍵を、という子もいますし。私がちょっとびっくりしたことは、暗くなった12月のことでしたかね、16時半ころ。もう鐘が鳴ったから音楽が鳴ったから帰らないのかと声をかけた時に、「だって今日はおじちゃんが来るから17時までここに待っていなきゃいけないんだ、今何時ですか？」というふうに女の子に言われたことがあるのです。えっ、と思ひまして、でももう暗いからお家の近くに行って、そこで待ってなさいと言ったのですが、その子はすごく遠慮をしていたのでしょね。おばちゃんはどこ？と言うから、あっちと言ったら、その子はこっち、と。じゃあおばちゃんについていくと言われましたので、おばちゃん家こっちだよ？離れちゃうよ？ということで、一応ついてまわってきたのですが、その子も帰る場所が、もし17時以降も空いている誰かが、高齢者の方でも誰でもいいと思うのですが、受け止めてくださる所があればいいかなあと思っております。

(進行 加藤氏)

ほんとに、家庭で朝早く出掛けちゃうけど、みてくれないかなあとか、そういうところがあつたらいいなあと、こういうことなのですけど。ここからはちょっと小野さんに、行政として今お話しを聞かれて色々お感じになっていること、あるいは行政としてやっていること、を含めて。

(パネリスト 小野副市長)

テーマというか、ひとつは、どう寄り添えるか、というか相談・支援という切り口かなというふうに思っています。森さんとは実は何回かこの話を一緒にさせてもらっていますが、要は子どもたちもご家庭の皆さんも、どう相談をしていいかもきっとわからないご家庭なのだと思います。なので、理解をしてくれたり、わかってくれたりする人とどう関われるか、子どもにしてもご家庭の皆さん方にしても。そのことによって実は、なんでもかんでも自分たちだけで守ろうとしていくというのではなくて、そこにいくつかの支援があつて、その支援をうまく利用してもらいながら自立していただくということの可能性を感じられるかどうか、ということもすごい大きなテーマなのではないかというふうに思います。そもそも相談するということは、相談する時と、自分の困りごとをこう変えたいなどということが認識できていることが多分条件になると思いますけれど、そのこと自体がよくわかっていないという皆様方も多分多いのだと思います。そういう意味では、相談・支援の仕組みということが、なんとというか共感してわかってくれる。それで、その人がもしかすると専門的な相談をする人ではなくて、地域の人で、森さんたちの役割だとした時にそこをしっかりと、専門的な相談・支援の機関側が、どういうふうにチームとしてその家庭と本人と関わりを持ちながら対応を検討できるか、そういう意味でいうと今、子どものことだけではないのですが、地域でコミュニティソーシャルワーカー（CSW）を11人の方に展開していただいています。地域の民生委員の方々や、相談機関の皆さんとCSWの皆さんと、学校との連携もかなり進んでいるということがありますので、そうしたことを利用しながら地域で見守っていくということと、相談と支援に繋げながら、ご家族共々変わっていく可能性を理解していただくことによって、積極的に相談をしていただけるようになるのではないかとこのふうにも思います。

それからもう一つは、居場所のこともそうなんですけど、この間の実態調査でいうと、小学5年生のニーズをみると、放課後の18時までの居場所という和多いですよね。中学生になると、放課後の居場所の18時以降にニーズが出てくると、もうひとつは静かに勉強できる場所というのも出てきます。それを見てくると、先ほどの時間帯と環境のことというのは、色々な可能性を選択できる可能性をどう提供できるかということも、もうひとつのキーポイントになるかなと、実はこれ簡単ではないので、ちょっと難しいテーマではありますけど、今回そういうニーズとして、把握ができていますので、今計画づくりを進めていますけれど、そのテーマの大きな柱のひとつに居場所というテーマをあげて、そこには相談の機能もあり、寄り添う機能もあり、見守りの機能もあり、安心して、そもそもそこに居られる、通えるってことも含めてちょっと多様性のことも考えなきゃいけないなと思っています。

(進行 加藤氏)

今お話しいただいたところで、アンケートの結果も含めて、特に高学年の人たちは夕方6時以降とか静かに勉強できるところが欲しいとかということ、行政的な対応も必要になると思いますが、では最後になりますけど、一言ずつ、これからしたいとか、こんなこと出来たらいいなあと思っていることを森さん、高見さん、行政として小野さん、何かありましたら。

(パネリスト 高見氏)

今副市長が言ったアンケートの結果も自分も見ているのですが、自分ができることは、シェアカフェをやっているんで、夜は空いていたりするので、そうやって一緒に見守ってくださる大人がもしあれば、長後食堂シェアカフェを開放して夜の居場所として。今度子どもの居場所を夜作ると、帰りはどうするの？とかいっぱい前も発言したことがあるのですが、大人は守る方のご意見がいっぱい出てしまうのですが、どちらを優先したらいいのかなと思いつつ、でも夜お時間ある大人がもしあれば、ひとりずつ送ることができれば一番問題がないのかなとか、今そのようなことは考えていたりします。

(進行 加藤氏)

地域ごとに協力してくれる人が出てくるといいですよ。

(パネリスト 森氏)

気づき、見守りの体制づくり。それから、それが切れ目のない支援。このようなものが出来たら、続けられたらいいかなと思います。

(パネリスト 小野副市長)

ありがとうございます。少し可能性が見えてくるというふうに思いますが、今困りごとを抱えたお子さんがいらして、実はその背景にどういう家庭状況があるのかということもしっかりと捉えていかなければいけないというふうに思っています。例えば、ご家庭が経済的にはいいけれども、例えば、ダブルケアで介護と障がいがある家庭の中にある人がいるとか、場合によると親御さんそのものにも例えば発達障がいというように、なかなか理解ができないような障がいということもありますし、そもそもその子どもたちが抱えている課題全体に実は家庭そのものをどう支援していくのかということ、しっかりしていかないと解決にはならないということも最近具体例としても出てきています。そういう意味ではCSWの皆さん方とも、そして今地域生活支援窓口ということで「バックアップふじさわ」ということで、包括ケアというようなことでの窓口もつくっていますので、全体をとおして子どもということ 키워ワードにしながら、その家庭全体を含めてどういうふうに支えていくのかということチームとして関わっていき、そのことをできる限り地域の皆さんとも共有しながらやっていく、ということがとっても必要なだろうなということが、相談・支援・見守りということだと思います。

もう1つは居場所という意味でいうと、そこには子どもをとおしての繋がりということで、実はそのことが地域づくりになっていくというような先ほどお話もありまし

たので、まさしく地域のコミュニティは希薄と言われてたりしますが、子どもをキーワードにしながら地域づくりの可能性というか繋がりがより進んできている自治体も感じられましたので、そのようなことも皆さんと一緒に、地域づくりという視点からも子どもというキーワードという、今度は逆の入り方もあるのかなというふうにも思いました。そういったことを皆さん方と一緒に進めさせていただければと思います。

(進行 加藤氏)

ありがとうございます。非常に良い進行が出来たと思いますが、藤沢ではコミュニティソーシャルワーカーの方が11人もいらっしゃるということで、民生委員さんとか声をかけて一緒に相談にのっていただくということも出来るし、バックアップふじさわができていますと、こういうことですね。

最後になりますけどね、今日やはり一番感じたことは、今までの子育て観とか教育観を本質的に切り替える必要があると、私たち自身が。今まで子どもを育てる責任は誰が持つのかといわれると、日本では家族とか親と言っていましたね。でも、親が見れない状況というのものもあるわけですよ、したがってこれはですね、地域社会や国含めて法としてきちっとして子どもたちを守っていくということをはっきりさせる、むしろ家庭を支えていくということが1つ。もう1つは、子どもの成長というのは今までは競争することによって成長すると私たちは自信を持っていたと思うのですが、そうではなくて、一人ひとりの子どもたちが、やりたい夢や希望をもって、丁寧に一緒に寄り添いながらいく、このことが子どもたちの成長に大事なことで、教育にとってこの2つがですね、私たち競争と家庭みたいなことを言っていたのですが、地域社会がこれを支える、そして一人ひとりの子どもたちがやりたいことをみんなで支えていく、見つけていくというふうに思っているのです。大変貴重な時間をいただきましてありがとうございました。

講演会に参加して ～参加者アンケート～

○参加者146名のうち、115名の方からアンケート提出のご協力をいただきました。いただきましたご意見等は今後の事業の参考とさせていただきます。たくさんのご意見とご参加をありがとうございました。

(参加者アンケート一部抜粋)

*加藤先生のお話で、「良い地域づくりは子どもたちを軸にするとよい」という言葉が印象的でした。お年寄りと子どもがうまく関わると理想的だなと思いました。

*藤沢の街を「よいふるさと」と感じる子どもたちが増えるようにしたいと思いました。

地域の子どもたちを見守り、話を聞きたいと思います。

*子どもを枠の中で評価するのではなく、実現できた努力の過程を評価する大切さを改めて教えていただきました。

*子どもの話をよく聴くこと。そこからニーズが見えてきたり、信頼関係につながる。そのためには顔の見える関係づくりが大切になる。

*講演をきいて、子ども同士で遊んでいるところをみると生き生きしている、その生き生きを育ててあげたいというのは日常の思いです。子どもは大人の想像しない事を考えています。こういう場所で見守りをしたい。

*子どもは大人と関わりを持ちたがっている。ただ、こちらから手を差し出していかないと、なかなか自分の方から言い出せないのでは？

*自分から発信できる子どもは良いが、発信できなくて見過ごされている子どもをどう見付けて支援していくのか？というお話を聞きたかった。

*子どもの居場所の話で、早い時間から、親が帰宅する遅い時間まで受け入れてくれる場所の話が出たが、気持ちとしては同感するが、実際を考えると関わってくれるボランティアが集まるのか？難しいと思う。現在もボランティアを見つけるのが大変です。

*CSWの活動をもっと知りたくなりました。私も悩みながら活動しています。

以 上